![C:\Users\zenrin\AppData\Local\Microsoft\Windows\Temporary Internet Files\Content.IE5\OYLOII2Q\MC900228485[1].wmf]()園長だより　令和元年９月号（20190927）　　　　　　　　　　　　　　　園長　平澤　正則

躾になってない

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　―　躾とは，子どもに丁寧に寄り添うこと　―

　これは実に難しい問題です。

　第一病院の待合所の奥の隅に子どもが遊ぶスペースがありますが，ついこの前のそこでの話。

私は舌が乾いて食べることが辛い母を連れ，１０ｍほど離れた口腔外科の前にいましたが，小１と年中くらいの男の子２人の兄弟がキャッキャとはしゃぎ，楽しそうに遊んでいました。体に不調のある人たちが集まっている所ですから，そのことの是非はお母さんもよく理解しているようで（と信じようとしました。），３０秒に一度くらい（頻繁なので数えてみました。）声が大きすぎると注意します。でも，子どもたちの耳には届かないようで（無視している風にも見えませんでした。），２分に一度くらいは「声が大きいと言ったヨ。」とやや声を荒げますが，ほんの数秒（くらいに感じました。）静かになるだけで，それを何回か繰り返しているうちに私も数えるのに疲れ，他の人たちと同じにじっと我慢していました。幸い（かどうかはわかりませんが）にも１５分か２０分ほどの内に，気がつくとその子たちはそこにいなくなり，静かにはなったのですがなぜか私にはこうして思い出しては考えてしまう出来事となりました。

　あの時，そばに寄って「静かにしないと迷惑なのですよ。」とかなんとか注意するべきだったのか。もっと親身になって子どもたちと話をするなどして真の教育者らしくその場を静める努力をすべきだったのか。日頃教育に関わる身にとっては無視してはいけないことだと自責の念にとらわれる一方，あの母親もわかっていてもその時の体調が思わしくなく，あるいは元気そうにしていた子どもが実はやっとの思いで連れてきた患者だったりして…。いろいろな想像ができ何も行動できない私でしたが，自分のことは少し棚に上げたうえでさらに母親としての行動を考えてみました。

　あの子たちはどこまでしたら母親が怒り出すか知っているのだと思います。言い換えれば，少しくらいの注意は気にしないでも大丈夫だと知っているわけです。でも，でもですよ。私は言いたいわけです。『それがまずい。』と。時々（母親と子どもたちの間にしょっちゅういたら時々では済まないと思いますが。）見かけるわけです。同じ注意を何度も口走るが子どもには一向に通じていない状態を。これは教育上非常にまずいわけです。最大の理解者たるべき母親（もちろん父親でも同じですが。）がオオカミ少年状態になっているわけですから。一度注意したことに対してはきちんとこれを守らせる努力が必要です。何のために，何を，どのように注意すべきか，これには一貫性が大事ですが，それを繰り返すことによって，子どもはたった一度で親の言うことを聞くようになるからです。躾とはそういうものだと思います。大声で怒鳴ったり，ひっぱたくようなことをする羽目になるのは，日頃の親の怠慢が原因となっていることが大変多いように思われます。

　あの時，母親が二人の内一人でも抱きかかえて自分の席に戻り，その子の耳元で『もう少しだから我慢しよう（とかなんとか，子どもに静かにしなくてはならない状態であることを理解させようと身体をつかってでも努力していたら，口先だけでなく）。』などと頑張れたら良かったのになあと思うのです。あの母親は普段から一人で仕事をし，稼ぎ，一人で子育てをしなければならない身の上だったのかもしれないと思えば，私の考えなども「そんな理想どおりにいくことばかりではありません。」と否定したくなる気持ちもわかります。だからこそ，難しいのですね。

　それでもなお，私は言わなければなりません。躾はその時にその時代に，その子のためにしなくてはだめなんですと。